大学院時代の思い出

永　田　節　子
（1976 年度 M, 1980 年度 D）

私が関西学院大学の英文科に大学院生として通っていた時期は昭和 50 年から 56 年にあたります。当時を振り返りますと，ちょうど多くの先生方が入れ替わられた時期でもありましたが，大学院で学んでいた時期，新しい文学批評や作品解釈の方法などについても学び日々刺戟を受けていました。大学院を出た後，少しずつですが作品を読み進めていき，また専門としていた詩人に関する研究会などでも研究を続けておりました。気がつくと，まだまだ道半ばのままもうじき定年を迎えようとしております。これまで研究を続けてくることが出来ましたのは，やはり大学院で作品を読む楽しさを知ることができたからだと思っております。

作品を読み込み言葉の奥に秘められたものを味わって読み解いていくことが何よりも楽しかったのですが，日々の現実は辞書を引くことに追われておりました。今でこそ，コンピューターで Oxford English Dictionary を使用して簡単に単語を調べることができるようになりましたが，当時は図書館に大きな百科事典のようなものが 16 冊並んでいて，1 冊ずつ取り出すのも重くとても予習には間に合わず，当時の大学院生の予算としてなんとか購入することのできた 4 ページを 1 ページへと縮小した OED の 2 冊セットの辞書を手に入れました。

その Oxford English Dictionary には大きな虫眼鏡がセットとしてついており，それで拡大して文字を見るような構造になっておりました。これでやっと図書館の書棚の前でうろうろと動き回らずに辞書を引けると喜んだものの，その虫眼鏡には目の前にある蛍光灯の光が白くぴかっとひかって映り，その小さな白い光がまぶしくて不便だととてもがっかりしたことをよく覚え

ております。17 世紀の劇作品を授業で輪読していた折も，その辞書を使用して予習に追われておりましたが，単語をひいてもその文章の意味がよくわからないこともあり，こんな状態で発表までに間に合うだろうかと思ったこともありました。ところがその時に，分からないと思えた文章も何度か繰り返して読んでいると分かってくるものだという経験をしました。同じ時期に授業を受けていた他の院生たちにこのことを話すと，「全く同じ，そのとおりだねー」という返事が返ってきました。

大学院での授業はどの授業においても，受講者である大学院生皆に緊張感があったことを思い出します。詩作品の分析の折でも，各自がそれぞれ作品を分析し自分の解釈を述べていくわけですが，発表後におだやかに「そうでしょうか」という指摘を受けると，一瞬「えっ？」という新鮮な驚きがあり，一回一回の講義が楽しみでした。

このような経験から，教師というものは辛抱強く学生の考えがまとまるのをじっと待って学生を導いていくものだということを学ばせていただいたと思います。いつの間にか自分自身が学生と向き合う立場になりましたが，この辛抱強さの大切さ，ひとりひとりが育っていくのをじっと見守ることの大事さを，自身が受けた経験から学ばせていただいたと思います。たまたまこのような研究をしていたおかげで，この歳まで若い人と触れ合うことができる仕事に就くことができ，学生たちからも日々いろいろなことを学ぶ機会を持つことができてありがたいと思っています。ただ，目の前にいる学生はいつでも変わることなく若いので，自分が年齢を重ねていることをすっかり忘れてしまいます。今，私達を取り巻く環境や時代の雰囲気はどんどん変化していると感じる毎日ですが，これからこの時代を映し出したどのような文学作品が生まれてくるのだろうかとふと思ったりするこの頃です。